

上伊勢畑の廃寺 永昌寺

常陸大宮市域には、かつて多くの寺院がありました。江戸時代前期の寛文年間（1661～1673）の時点で、常陸大宮市域には少なくとも200を超える寺院が存在したことがわかっています。しかし、徳川光圀や徳川斉昭が実施した寺社改革や、明治初期の廃仏毀釈によって、寺院の多くがその姿を失いました。現在は、地名やわずかな史料、伝承からその痕跡を伺うことができますが、その実態については不明なことが多いです。今回は、その中から、上伊勢畑地区にかつて存在した永昌寺について紹介していきます。

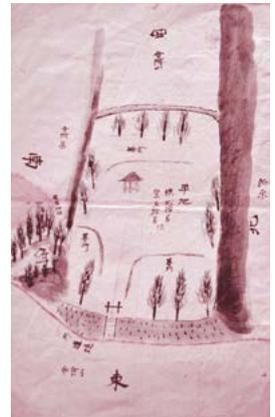
◇永昌寺の概要

天照山永昌寺は、上伊勢畑地区大平に存在した曹洞宗の寺院です。室町時代中期の永享3年（1431）、当時この地を治めていた長倉氏の家臣中村備前の菩提所として建立されたと伝わっており、元禄11年（1699）の頃には、同じ曹洞宗である蒼泉寺（長倉地区）の末寺となっています。本尊は十一面観世音であり、唐座観音像や誕生仏、地藏尊、涅槃像、半鐘などもあったそうです。（「上伊勢畑村什物帳」上伊勢畑区有文書174）。元禄11年作成の「上伊勢畑村菩提旦那改帳」（上伊勢畑区有文書166）によると、上伊勢畑村の戸数99軒のうち、97軒が永昌寺の檀家（他 長倉・正覚寺1戸／野口・寿命寺1戸）であったことから、寺請制度下の上伊勢畑村内においてかなりの影響力を有していたことが伺えます。また、永昌寺が祠堂金（村人が先祖供養のために寺へ納めた金銭）を利用して金銭の貸付業を実施しており、利息によって得た収入の一部を本山である蒼泉寺に納めていたことも確認できます（「永昌寺祠堂金利預り帳」上伊勢畑区有文書182）。このほか、珍しいものでは、永昌寺に籍を置く僧侶の名や年齢が記載された人別帳（「茨城郡上伊勢畑村永昌寺千人別改元帳」上伊勢畑区有文書172）が残されており、安永3年（1774）4月の時点で、住職である



▲写真1 永昌寺跡地（上伊勢畑地区）

「興隆」と、弟子である「存隆」と「本隆」の3名が永昌寺にいて、弟子の存隆が行脚のため不在となっている事が確認できます。そんな永昌寺ですが、天保13年（1842）の検地帳には記載が見られるものの、明治9年（1876）の史料に「天保度廃寺」と書かれていることから、おそらく検地帳の作成直後に廃寺になったものと考えられます（「鎮守境内反別反金共取調書上」上伊勢畑区有文書746）。廃寺となった後、幕末の頃までは堂宇が残っていたことが確認できますが（写真2）、明治に入ると永昌寺の土地は民間に払下げられ、畑地などに使用されました。



▲写真2 元治元年（1864）3月の永昌寺境内図（上伊勢畑区有文書191）

◇永昌寺と連山禅師

永昌寺と関係が見られる僧侶の中に、江戸時代初期の水戸藩で活躍した連山禅師和尚が確認できます。連山和尚は曹洞宗の発展に尽力した僧侶で、曹洞宗の名刹である大甲寺（栃木県栃木市）で僧録司（寺内の僧侶を管理する役職）を務めた人物としても知られています。彼は上伊勢畑村の生まれであり、彼の母親が永昌寺の仏さまに祈りを捧げ、連山和尚を授かったという逸話が残されています。和尚の死後、遺骨の一部は永昌寺に埋葬されました。永昌寺跡地には、連山和尚の墓石が今なお残されています。



▲写真3 連山禅師和尚の墓所

【参考文献】御前山村郷土誌編纂委員会『御前山村郷土誌』御前山村 1990年、常陸大宮市歴史民俗資料館『常陸大宮ふるさと見て歩き』常陸大宮市教育委員会 2014年
(高橋拓也)

■問い合わせ■ 文書館 ☎52-0571